

市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラム【概要】

1. 経緯

- (A) 1983年 地域に生き 世界に伸びる
- (B) 2001年 SPS向上ワーキング報告：大阪大学における学生生活の充実について
 - i **報告書の内容**：①大学運営への学生参加、②学生の教育・研究へのインセンティブの向上策、③大学施設の一般学生への開放、④情報ネットワーク環境の整備、⑤教育環境・福利厚生施設の充実、⑥学年暦の見直し、⑦メンタルヘルスケアの充実、⑧学生の意見の取り入れ方
 - ii **基本理念**：「学生を信頼して自主性を重んじるとともに責任自覚型教育の中でパートナーシップを高める」→①学生をパートナーとして認める、②学生-教職員間のコミュニケーションの促進、③学内の生活環境の向上：ドリームプランの実現
- (C) 2007年 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP プログラム）：市民社会におけるリーダーシップ養成支援

2. プログラムについて

- (A) **趣旨目的**：①市民社会にロイヤリティを持ち、②市民社会でコアとなる、③・「阪大スタイル」の人材育成
- (B) **阪大スタイル**：①Common Sense, Good Sense、②対話力、企画力、構想力、想像力、③・社会における組織のあり方を理解し、③望ましい方向に引っ張っていける力、④・市民のモデルとなる市民
- (C) **概要**
 - i **対象学生**：①学部学生の1～2%、50名以下（主にクラスやサークル、ボランティアなどで中心となって活動している学生）、②公募による選定（コアとなる意欲ある主体的な学生を支援→支援の輪の拡がりを期待）
 - ii **実施体制**：①学生部職員が主体（キャリア支援課・学生支援課）、②学内教育組織・教員が積極的に協力、③学生メンターの育成、④民間コンサルティング企業のノウハウ利用
 - iii **ワークショップ型研修**：①目標設定、②問題意識の共有、③課題の実践
- (D) **ワークショップ型研修 Osaka University Development Seminar for Leaders (OUDSL)**
 - i **内容**：
 - 第1回「目標の設定と共有」：チームビルディングとモチベーションコントロール技術の習得、第2回「対話力と指導力・国際性」：ビジョン設定と対人影響力の習得、多文化共生の理解、第3回「デザイン力と判断力」：プランニングの技術とモチベーションマネジメント技術の習得、第4回「知の共有・気づき」：活動内容の振り返りおよびリプランニングの習得、第5回「次世代への継承」：メンター育成のためのアクティブラーニングスキルの習得

ii 期待される効果：

1. デザイン力を持った人材の育成：

本プログラムを通じて、リーダーとして必要な考え方や技術を修得する機会を提供し、そこで学んだことをクラスやサークルで実践する。そして、振り返りを行うことにより、経験の知を共有し、さらなる新たな観点を学び、再度、実践展開していく。このようなスパイラル・サイクルを創生していくことによって、市民社会におけるリーダーに必要とされる社会的変革の実践的なデザイン力を効果的に高めていく。

2. クラスやサークルの活性化と活動内容の質の向上

学生リーダーのリーダーシップが強化されることにより、各々の所属組織であるクラスやサークルのメンバーへの影響から、学生個人の活動への意識と質の向上につながる事となる。こうした重点支援による体得したリーダーシップ力が、分散型リーダーシップとして各組織に連鎖的に広がり、結果的に、学生組織全体の活性化と活動内容全体の質の向上につながる

iii 今年度のプログラム予定 - OUDSL (3泊4日 合宿研修)

- ・ 1回生 9月17日～20日
- ・ 2回生 8月27日～30日
- ・ 3回生 9月24日～27日

ブログ「法理論を語る」(福井康太先生)

2008年5月23日(金)15時から16時30分まで、大阪大学豊中キャンパス OSIPP 棟 6F プロジェクト研究室にて、大阪大学リーダーシップ教育研究会第1回会合が開かれました。本研究会は、大阪大学におけるリーダーシップ教育に関する情報を交換し、産学・社会学連携を図りつつ、分野を超えた共同研究を行うことによって、効果的な教育方法を開発し、日本におけるリーダーシップ教育の普及とよりよいリーダーシップの育成に貢献することを目指す研究会です。今回の参加者は、デュポン(株)相談役で大阪大学大学院国際公共政策研究科特任教授の小林昭生先生、弁護士で大阪大学大学院国際公共政策研究科客員教授・桐蔭横浜大学法科大学院教授の大澤恒夫先生など、錚々たるメンバーでした。今回はメンバーの顔合わせと名称・趣旨の確認など、主として事務的な事項を話し合う場でしたが、大阪大学で複数行われているリーダーシップ教育の取り組みの紹介があまりに興味深かったので、簡単に概要を紹介しておきたいと思います。

大阪大学では、国際公共政策研究科・高等司法研究科教授の野村美明先生がこの4月から立ち上げておられる「グローバルリーダーシップ・プログラム」のほかに、医学系研究科教授(医学部保健学科長)の大和谷厚先生と大学教育実践センター教育実践研究部キャリア教育支援部門教授の木川田一榮先生が運営しておられる「市民社会におけるリーダーシップ養成プログラム」があり、それぞれ異なる観点からリーダーシップ教育を行っています。今回紹介されたのは、後者の「市民社会におけるリーダーシップ養成支援プログラム」の取り組みでした。「市民社会におけるリーダーシップ養成支援プログラム」は、大阪大学が懐徳堂や適塾を起源とし、市民の力で設立されたというその歴史にちなんで、市民社会でリーダーシップを発揮するリーダーを養成することを支援しようとする試みです。そこでは「多様な学生に多彩な支援」を与えることが目標とされています。市民社会のリーダーには、①Common Sense Good Sense、②対話力、企画力、構想力、想像力、③多文化共生能力、④社会における組織のあり方を理解し、望ましい方向に引

張っていける力が求められ、そして、⑤市民のモデルとなる市民でなければなりません。そのような能力・資質を学生にどのようにして身につけさせるのでしょうか。

このプログラムでは、主にクラスやサークル、ボランティアなどで中心となって活動している、やる気のある少数の学生（全学生の1～2%、50名以下）が公募で集められます。そのような学生が自主的にプログラムの運営に関わるということがポイントです。そして、総長、副学長をはじめとする大学トップの直接の関与のもとにワークショップ型研修が年に数回開かれます。ワークショップでは講師が学生に様々な問題を投げかける（結論を出さない）形で対話が行われます。例えば、何も説明もなしに参加学生にドナーカードが配られ、それによって人の死と臓器移植の問題を真剣に考えさせ、そこから対話を始めるといった方法がとられます。その際、学生にはどのような方向が望ましいというような方向付けは一切行われたいそうです。むしろ、そこで目指されているのは、学生の固定観念に揺さぶりをかける「創造的破壊」です。学生同士が対話実践を通じて相互の気づきの促すことが期待されています。

はたしてそのようなやり方に効果があるかどうかですが、絶大な効果があるようです。ワークショップに参加すると、「いか阪」（「いかにも阪大生」の略）？であった学生も、高いモチベーションを備えた積極的な学生に変化するのだそうです（もともと、もともと参加意識の高い積極的な学生が集まっているので、一般学生すべてにこのような効果があるわけではないことに注意する必要があります）。

いくつか課題の指摘もありました。まず、変わることが必要なのは、もともとやる気のある少数の学生ではなく、大多数の「いか阪」の学生であること、また、対話を通じて学生に気づきを促す授業を行うことが出来る教員はきわめて少ないこと、さらに、学生の変化を促す存在には教員だけではなく事務職員も含まれるのであり、事務職員にも変化が求められることなどが指摘されました。手間暇のかかるプログラムを実施するための資金をどうやって確保するかも課題です。課題はなお山積していますが、まずは出来るところからやってみようということだと思います。大阪大学から世界を変えるようなリーダーは育つのでしょうか？長い目で見ていかなければなりません。